

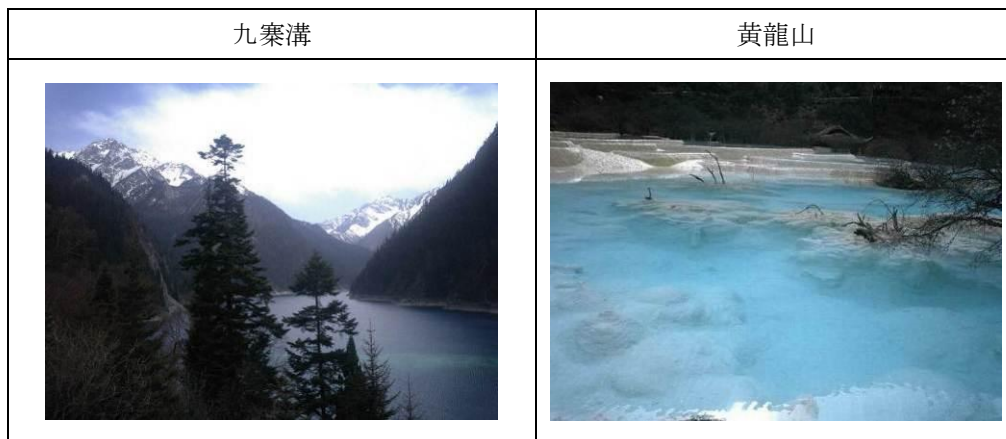
第7計;中国人は中国人どうしの喧嘩(けんか)になったとき、中国人の警察官でさえも何故喧嘩を止めようとししないのか?

一(兵法36計の4番目の計)以逸待勞(いいつたいろう)の計所謂「放置主義」一

中国でも日本でも、中国人どうしの激しい言い争いを目撃した日本人は多いと思います。先日、登山を趣味にしている友人から聞いた話ですが、四川省の有名な観光地“黄龍山”で橋を渡る時、中国人同士が肩をふれ、一人のカメラのケースが川に落ちた。

すると激しい言い争いで、まわりの観光客が歩けなくなりました。この時、日本人の中年女性が登山靴を履いており、水も浅かったので川に入りケースを拾って渡すと、やっと喧嘩は収まったとの話でありました。

私は2回春と秋に登ったことが観光地です。風景はスケールも雄大で、とても綺麗なところがあります。この山に登山しようとされる方は、決して水とキャラメルをなめる事を忘れないようにして下さい。頂上約3700m迄行くとかなりきつく、訓練をしていない仲間の半分は高山病になること必定でありますから。



私自身も交通事故の喧嘩に起因する交通渋滞に何回か遭遇しております。バスの運転手が歩行者に接触すると、運転手は降りない。従って元歩行者は、バス運転手を殴りに行きます。中国人の乗客は無言、パトカーが来ても一瞥するだけ。当人同士はどちらも「お前が悪い」と言っている。運転手が殴られて、殴った男が降りてくると、交通渋滞が緩和されるのであります。この出来事で中国人には“放置主義”があるのを再認識しました。

交通事故でパトカーが被害者を病院迄連れて行って玄関で放置する。被害者でも金がなければ放置する。人の自転車に乗ってどこかに放置する。中国の国際線の飛行機は出発が相当遅れても、説明もなく乗客を放置する。警察官も、医者も、学校の先生も、老人も、成人した人間でも、子供でも、「ここまで放置主義が社会習慣である

とは? 」と感心するのであります。

特に交通警察官に於ける慣習では、群衆の中で取扱いを誤れば、逆に警察官が騒ぎを拡大させたことになる為、しばらく（10分～15分）放置するらしいのです。警察官が介入する時は仲間に応援を頼むとの話を知人の警察官から聞いたこともあります。警察官の戦法には兵法 36 計の 4 番目の計以逸待勞（いいつたいろう）が含まれていたようです。

後漢時代、反乱軍が陝西省の陳倉を攻めた。しかし援軍の皇甫嵩は、陳倉は簡単に落ちる城ではないと判断し、反乱軍が疲れるのを待った。やがて疲れて敗戦の色が濃くなった反乱軍は撤退を始めるが、その機を逃さず攻撃をして、反乱軍を壊滅させた。

戦う時、自分を楽な場所に置いて相手を疲れさせれば、それだけ有利になるというのが、中国警察官の“放置主義”であるようです。

2010 /10/16